

# 平成26年度の災害を中心とした事例集

平成27年4月

消 防 庁

# 目次

## 土砂災害事例

長野県南木曾町(平成 26 年7月9日)	1
兵庫県丹波市(平成 26 年8月 17 日)	5
広島県広島市(平成 26 年8月 20 日)	9
北海道礼文町(平成 26 年8月 24 日)	13

## 大雪災害事例

埼玉県秩父市(平成 26 年2月 14 日)	17
山梨県甲府市(平成 26 年2月 14 日)	21
徳島県三好市(平成 26 年 12 月5日)	25

## 火山災害事例

長野県王滝村・木曾町(平成 26 年9月 27 日)	29
----------------------------	----

## 地震災害事例

長野県白馬村(平成 26 年 11 月 22 日)	35
---------------------------	----

## 1 南木曾町長からのメッセージ

## 『過去の災害に学ぶべき!!』 南木曾町長 宮川 正光

南木曾岳の頂上周辺の本当に狭い範囲で、非常に強い雨が降って、突然、災害が起きました。犠牲者1人を出した「梨子沢」では、堰堤で高さを6.5メートルにかさ上げする工事が完了した直後でした。この堰堤がものすごい巨石を受け止めてくれました。これがなければ、どんな大きな被害になっていたことか。

実は、この災害の直前まではしばらく梨子沢での工事は何もやっていなかった。もともとは40年ほど前の昭和44年の大災害で堰堤を作った。その後、最近になってから国の砂防事務所が毎年見に来てチェックするようになり、梨子沢は上流の土砂の量に比べ堰堤が低いとってかさ上げしてくれた。国などの機関と普段から連携しておくことは至って重要だと思います。

南木曾町周辺の土石流の性質というのは、土石流が一度起きると40年から50年サイクルで起きてきた歴史がある。山に木や石、そして砂などが堆積すると、それが土石流になるということで、前回の災害から40何年も経っているのもっと深く警戒しないといけなかった。

過去の災害を知っているお年寄りの皆さんは、逃げるんですよ。わかっていますね、ある程度降れば。地響きがしたとか言ってね。ところが、若い人たちは初めての体験で、家の中で寝てしまったりということになる。災害の体験を伝えていくことはとっても重要だと思います。

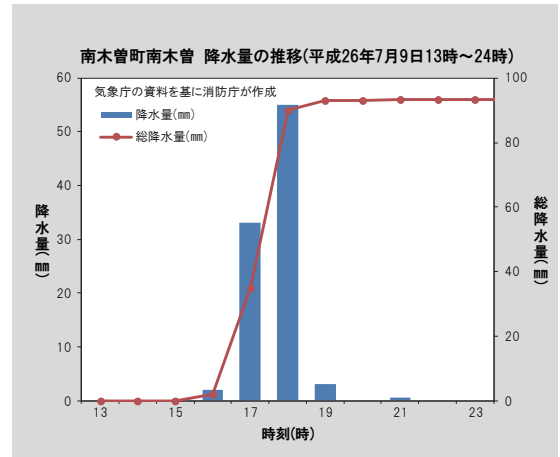
## 2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
7月9日	16:19	大雨洪水注意報発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難勧告等は土石流後(平成26年7月11日・朝日新聞) 長野県南木曾町において、土石流が7月9日午後5時40分ごろ発生。長野地方気象台が大雨注意報を警報に切り替えたのは5分後、町が673世帯に避難勧告を出したのはさらに5分後だった。気象台と長野県が町に土砂災害警戒情報を出したのは午後6時15分だった。町では午後3時の段階では強い雨は降っていなかった。同3時40分ごろに強まり、同4時40分からの1時間で97ミリの猛烈な雨になった。宮川正光町長は「雨の降り方が急すぎて、あれが精いっぱいだった」と話した。</li> <li>・的確な警報発令を(平成26年7月12日・読売新聞) 突然の豪雨を受け、南木曾町が避難勧告を出したのは、土石流発生後の10分後だった。町長は、「予想できなかった」と語ったが、対応が後手に回ったのは否めない。気象庁が大雨洪水警報を発したのも、土石流の直後だった。南木曾町では過去に何度も土石流が起きている。今回の現場も土砂災害警戒区域に指定され、詳細なハザードマップを整備し、土砂災害に取り組んできた。現場の上流部には砂防ダムが2基あり、さらに1基が完成間近だった。危険を伴う地域であることを前提に、対策を講じてきたが、人的被害を防げなかった。異変の前兆をいかに早く捉えるかが、被害を防ぐカギになろう。古屋防災相は「降雨レーダーの精度はあがっている。きめ細かく、ピンポイントで情報を伝える方法を検討したい」と述べた。</li> </ul>
	17:40頃	土石流発生	
	17:40	南木曾町災害対策本部設置	
	17:45	大雨洪水警報発表	
	17:50	町中心部地域に避難勧告、その他地域に避難準備情報発令	
	18:16	土砂災害警戒情報発表	

### 3 気象の概要

7月9日、台風第8号は15時には九州の西を北東に進んでいた。一方、朝鮮半島から東北地方に停滞する梅雨前線に向かって、南から暖かく湿った空気が入り、関東甲信地方では大気の状態が非常に不安定となった。

このため、昼過ぎから夜のはじめ頃にかけて、県内の所々で積乱雲が発達し、雷を伴った非常に激しい雨が降った。特に、南木曽では17時40分までの前1時間に70.0ミリの非常に激しい雨を観測した。また、解析雨量では南木曽町付近で、17時30分までの前1時間に約90ミリの猛烈な雨を解析した。



### 4 被害の概要

- 場 所:** 長野県 木曽郡 南木曽町 読書 東町
- 発 災 日 時:** 平成26年7月9日(水)17時40分頃
- 人 的 被 害:** 土石流により家屋にいた家族4人が流され、うち1人が死亡、3人が負傷
- 住 家 被 害:** 全壊10棟、一部損壊3棟、床上浸水3棟、床下浸水6棟
- 非 住 家 被 害:** 全壊6棟、大規模半壊3棟、半壊3棟、一部損壊2棟、床上浸水2棟、床下浸水6棟
- そ の 他 被 害:** J R中央本線の橋梁流出、国道19号に土砂流入など

土石流発生現場



### 5 災害の時系列

#### 7月9日(水)

##### 16:19 大雨・洪水注意報発表

ちょっと強い夕立ぐらいに思っていました。その日は午前中ものすごく暑い晴天で、3時から曇り始めて、本格的に降り出したのが4時くらいじゃないかな。

次の日に台風が来る予定だったので、総務課長やみんなと、「災害警戒本部をあすには立てないといけないね」と話していた。

##### 17:40 ワイヤースンサーが切れたとの一報が入り土石流が発生

##### 避難指示発令(梨子沢周辺)

災害が起きた沢筋でたまたま工事をやっていて、その業者が自分たちのために設置していたワイヤロープが「飛んでしまった」という通報が第一報だった。すぐに役場から窓越しに見ると、木材などが流れていくのが見えて、これは大変だと言うことで梨子沢周辺に避難指示を間髪無く出した。

そして、災害対策本部を直ちに設置した。まずは安否確認。安否確認を消防の方にお願いし

た。2次災害になるために近づけないので、すべての住民の安否が確認できたのは夜の12時近かった。

**17:40 南木曾町災害対策本部設置**

**17:45 大雨注意報解除**

**大雨・洪水警報発表**

**17:50 町中心部の地域に避難勧告、その他の地域に避難準備情報発令**

土石流の危険な所がいろいろあるから町の全域に避難勧告と準備情報を出した。その時には100ミリも降っているという認識はなかった。この辺で100ミリもの雨が降ればわかりますから。とても大きな大粒の雨が降るのを経験しているから。真っ白い雨が降る。

今回はそんなことなかった。雨量を確認すると、蘭地区の方が時間100ミリを記録していた。災害が起きた梨子沢は70ミリ。蘭地区の方が雨量は多かった。蘭地区でも、数か所で土石流が出ていた。

**18:16 土砂災害警戒情報発表**

雨は土石流が起こって以降は小康状態でした。雨は上がりかけだったので、次の災害への不安感は住民もほとんどなかった。

また、気象台の情報を見ても、今後雨が降り続いて大変という意識はなかった。むしろ、住民の安否確認が大変だった。

**21:18 洪水注意報発表**

**22:40 避難勧告の一部解除（木曾川右岸地区）、その他の地域の避難準備情報解除**

**23:00 災害救助法適用**

町が良かったのは、国交省のロールプレイング方式の訓練を直前に2回やっていたこと。2回目を終わった時のそのままの状態が実際に起きたというので、誰がマスクミ対応するか、誰が何をやるのかという訓練をやっていたとおりに、すぐに役割分担ができたのがよかった。

**23:21 洪水注意報解除**

**7月10日(木)**

**11:46 再び一部の地域に避難勧告**

台風の接近に伴い、再び大雨になる恐れがあり、早めに避難勧告を出した。

**14:38 再び一部の地域に避難勧告**

**16:48 大雨警報発表**

**洪水注意報発表**

**7月11日(金)**

**9:00 避難勧告一部解除**

**17:00 土砂災害警戒情報解除**

**17:11 大雨警報解除**

**18:00 災害ボランティアセンター開設**

**7月12日(土)**

**8:30 避難勧告・指示全域解除**

**13:00 ボランティアの活動開始 (19日まで継続)**



1 丹波市長からのメッセージ

『避難呼び掛けは早口で何回も』 丹波市長 辻 重五郎

雨への警戒を強めていた8月17日午前0時20分、テレビに土砂災害警戒情報が出て「丹波市に土砂災害の危険」とあった。「こりゃえらいこっちゃ」と思い、神戸地方気象台に直接電話せいと言った。気象台職員は「このまま朝6時まで雨が続きますよ、警報は出しっぱなしですよ」と言われた。これは覚悟すべきだと決めました。

午前2時に3地区に避難勧告を出した。勧告（の放送）は1回きりではいけない。夜中で気付かないかもしれない。1回目はあまり動かなかっただけですわ。2階に逃げてくださいと繰り返すことで2階に上がった人が多かった。私の方で「言い方を考えて、もっと緊迫感をもって伝える気持ちで。ゆっくり言わんで、早口で何回も言え」と言った。避難しようかと気持ちがなるように、「2階に逃げてください」と繰り返す、危ないことを短く伝える。これは効果ありますね。

災害が発生したのは、勧告出してから約1時間後だった。勧告が遅かったら2階に行けずじまいだった人もいただろう。勧告出すには勇気と決断が要る。最終的には自分で命を守るのが結論。一人一人で判断してもらえない（防災情報は緊急性が高い。安易な判断をせず、行動を起こすことが重要である。）

2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
8月16日	15:35	大雨警報発表	・丹波豪雨 キャンプ場で250人一時孤立 不安な夜過ごす(平成26年8月18日・神戸新聞) 丹波市市島町与戸のキャンプ場「キャンプリゾート 森のひととき」では、出入り口付近の道路が土砂崩れで埋まり、宿泊客約250人が一時孤立した。土砂は17日昼すぎに取り除かれ、全員が無事に避難したが、家族連れたちが不安な時間を過ごした。キャンプ場は5万平方メートルの敷地にコテージなど約50棟が点在。17日午前2時ごろまでに敷地内を流れる川から水があふれ、敷地のほぼ全域が濁流につかった。関係者によると、川沿いのデッキハウス7棟が全壊状態で、管理棟が床上浸水、宿泊客の車4台が土砂で動けなくなった。小学生の子どもを含む2家族8人で訪れていた神戸市兵庫区の会社員(45)は川沿いのデッキハウスに宿泊。水かさが増した同日午前2時ごろ、川から離れて車の中で夜を明かした。朝になるとデッキハウスは濁流にのまれて壊れていたといい、「そのままいたら流されていた」と声を震わせた。
	19:00	丹波市災害対策本部設置	
8月17日	0:20	土砂災害警戒情報発表	
	2:00	2,259世帯6,037人避難勧告	
	3:05	673世帯1,791人避難勧告	
	3:23	1,643世帯4,458人避難勧告	
	3:30	県に自衛隊派遣要請	
8月18日	6:00	市島町キャンプ場で利用客が孤立 避難所開設11か所に	
	12:00	市内対象全域避難勧告解除	

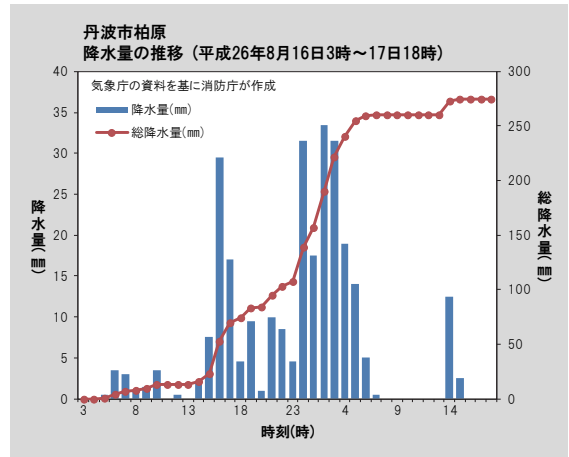


### 3 気象の概要

8月15日から20日にかけて、前線が本州付近に停滞し、前線を低気圧が東に進んだ。前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本と東日本の広い範囲で大気の状態が非常に不安定となった。

このため、特に、16日から17日にかけては、近畿地方や北陸地方、東海地方を中心に大雨となり、局地的に猛烈な雨が降った所もあった。また、19日から20日にかけては、九州北部地方や中国地方を中心に大雨となり、局地的に猛烈な雨が降った所もあった。

15日から18日までに観測された最大48時間降水量が、兵庫県丹波市柏原で278.5ミリとなり、観測史上1位の値を更新した。



### 4 被害の概要

- 場 所：兵庫県 丹波市
- 発 災 日 時：平成26年8月16日(土)6時50分
- 人 的 被 害：死亡1人、負傷4人
- 住 家 被 害：全壊18棟、大規模半壊9棟、半壊42棟、一部破損1棟、床上浸水169棟、床下浸水784棟
- 非 住 家 被 害：全壊29棟、大規模半壊3棟、半壊7棟、一部破損1棟、床上浸水138棟、床下浸水1,603棟

土砂災害発生現場



国土地理院 資料

### 5 災害の時系列

#### 8月16日(土)

##### 15:35 大雨警報(浸水害) 洪水警報発表

お盆期間中の土曜日だったが、その前から雨が結構降っていたので担当職員は出ていた。私は自治会の食事会に出ていた。警報が出ると、まず市長に連絡が来ることになっている。「すぐ行くわい」と返事し、登庁した。

##### 18:26 大雨警報(浸水害)解除 大雨注意報に切り替え

##### 19:00 丹波市災害警戒本部設置

情報収集した上で、まずは警戒本部を設置した。

##### 19:39 大雨警報(土砂災害)発表

##### 21:00 警戒本部会議

6つの支所とテレビ電話による会議を開き、情報を共有した。瞬時に情報が上がってくるのでテレビ電話はいい。



## 22:50 旧市島町の3カ所で災害の恐れがあると職員2号配備

雨量の情報などを集約して判断した。1号配備は全体の3割程度の招集。2号は半分（5割）ぐらいの招集で、3号は全員。この配備によって避難所開設の準備はしておいた。テレビを引けるようにし、段ボールの組み立て用ベッドの準備もしていた。

8月17日(日)

### 0:20 土砂災害警戒情報発表

防災用の大型テレビを付けていたし、情報は入ってくる。雨は経験あったけど、土砂災害警戒情報は、これまで多くはなかった。押しつぶされてしまうし、怖いな、えらいこっちゃと思った。ただ（雨雲は）移動するものだし、1時間ぐらいしたら過ぎるのではとも思い、直接気象台に電話せいと（職員に）言った。そしたら気象台職員は「避難勧告するかどうかまでは気象台で指示できませんが、ただこのまま朝の6時まで雨は続きますよ、警報は出しっぱなしですよ」との回答だった。あの時点でさらに4時間以上続いたらとんでもないことになるなと思った。過去に例のない大変な事態になるのではと大きな不安を抱いた。

### 0:31 大雨警報（土砂災害）に大雨警報（浸水害）が加わる

#### 1:15 丹波市災害対策本部に切り替え

#### 2:00 2,259世帯6,037人に避難勧告

まず出したのは旧市島町の3地区。兵庫県のフェニックス防災システムで地域を絞った。1キロ四方で雨量がわかるメッシュ単位のデータは有効だった。うちは2004年台風で自動車が流されて犠牲者が出ている。09年に（夜間の移動で）犠牲者を出した兵庫県佐用町の豪雨災害のことも念頭にあった。夜間と昼間の避難は違う。外はすごい雨が降っているのに、避難所を開設したから真っ暗な中を行きなさいと言っても行けないでしょう。排水溝に足元をすくわれる恐れもある。前から垂直避難という言葉は知っていたし、外に出るのは危ないと思った。勧告（の放送）は1回の放送の中で繰り返し呼びかけた。戸別受信機は配備していた。後で聞いたら1回目ではあまり動かなかっただけですわ。1回じゃ夜中だし、気付かないかもしれない。「言い方や直せえ。もっと緊迫してやれや。ゆっくり言わんで、危ないということをや、早くで何回も言え。横から（マイク持った職員に）指導せえ」と防災担当部長に言った。気持ちが避難するように言わないと。繰り返すのが効果ありますね。避難行動につながるよう「2階に…」と具体的に放送した結果、2階に上がった人が多かった。

#### 3:05 673世帯1,791人に避難勧告

災害は3時から3時半ぐらいにかけて起きている。1時間ぐらいしか猶予がなかったことになる。被災者は一様に「土のにおいがしたと思ったらドドッときた」と口をそろえる。

#### 3:23 1,643世帯4,458人に避難勧告

各地で道路が冠水、被害把握不可能に

#### 3:30 県に自衛隊の派遣要請

道路が土砂で埋まり、市島町のキャンプ場で利用客約250人が孤立したので来てもらうことにした。

#### 6:00 避難所開設11カ所に

市島町のキャンプ場で利用客約250人が孤立

市島町の土砂崩れによる全壊家屋から男性の遺体発見

8月18日(月)

#### 12:00 市内対象全域の避難勧告を解除

---

5カ所で給水活動開始

市島市民グラウンドを災害ゴミの仮置き場に決定

8月19日(火)

---

丹波市ボランティアセンターを開設

JR福知山線石生～福知山駅間の代行バス運行開始

市営住宅へ避難者の一時入居開始

8月20日(水)

---

市島支所に現地災害対策本部を設置

## 1 広島市長からのメッセージ

**「災害以前にこうしておけばよかった」と思うこと、今後に向けて 広島市長 松井 一實****○「災害以前にこうしておけばよかった」と思うこと**

危機管理体制の見直しができているれば、違った対応ができたと思う。平成24年1月に発生した刑務所の受刑者脱走の事案後、事件、事故を含む危機管理を消防局に一本化した。それをしていなければ、もっと大変だっただろう。ただ、より全庁的な危機管理体制を構築しておけばよかったと思う。人命救助は消防がしっかりやり、その動きを危機管理セクションがフォローして、進捗状況などを私のところでチェックできる、という仕組みだ。今回は、消防局が危機管理・調整まで担い、市長に報告するという体制だった。責任感をもって遂行してくれたが、消防局としてはかなりハードな状況だったと思う。

応急復旧の工程表、いわゆるロードマップづくりは、消防局で担うとパンクしてしまうので、違うセクションで行った。県や国との調整もあったためだ。現場対応と、情報を加工して全体への指示系統に組み直す作業は、分離してやる必要がある。現場では、捜索を進めながら、ある程度のところで土砂を取り除く作業なども行いたい。だが、それは消防ではなく、下水や土木関係のセクションが、地元の業者に発注する必要がある。道路の管轄は国道、県道、市道があり、それを仕分けて指示しないといけないが、今回は副大臣、知事と協議し、その管轄別の分けをせず、エリアごとに手分けした。この区域は国、この区域は市、というふうに。経費負担については協議体の中で議論をしよう、ということで、トップ同士で判断した。

民家の家屋の解体・撤去は個人の負担というルールがあるが、それも無償でやるという判断をした。役所が判断を出す前に、自ら業者を雇って家屋の解体・撤去をした市民もおり、「支援格差だ」とマスコミに指摘された。事後的に個人に費用を出すことはできないので、義援金の上乗せという形で手当てした。「支援の格差がある」ということを、住宅確保などさまざまな面でマスコミに指摘された。これはきつかった。

**○今後に向けて**

地域の防災を担う自治会長、世話役の人々との接点が重要だ。災害時も、そういう人々に「行政がこういう対応をしている」と理解してもらえれば、住民の不満がそこで解決される部分がある。地域の世話役となっている人々への情報伝達、意思疎通を、日頃からやっておき、緊急時はそれ以上に一生懸命やる必要がある。町内会への加入率を高めたり、地域で活動する人々を行政がサポートする体制をとったりすることが必要だろう。社会福祉協議会、自治会、民生委員・児童委員など、こうした人々の役割をもう一度確認して見直す。できれば、若い世代に引き継げるようにする支援策を、行政が明確に打ち出す必要がある。それが非常時の備えにもつながる。消防団、自主防災組織も含めて考える。「自治だから」と放置しない。役所の仕事をしてもらおうときだけお金を出すのでもない。自治組織の活動を支援したい。

市民一人一人の情報入手手段も考えていかねばならない。緊急時の情報伝達手段として、サイレン、無線、有線などがあるが、今までの行政は、このエリアは無線、ここは有線、というように境界線を決めていた。重複すると予算が無駄になるためだ。だが、今回の経験から、行政効率、費用効率ばかりにとらわれず、情報の「ダブリ伝達」があってもいい、と考えている。いきなりすべてはできないが、「ダブリにこだわらない」という姿勢で対策を進めたい。携帯電話を持っていない人もいる。持っていない人も含め、まんべんなく情報が伝達される必要がある。

さらに、双方向の交信ができれば、被害現場の情報を役所が入手することもできる。まだイメージで、具体的ではないが、工夫の余地があるのではないかな。

## 2 報道内容

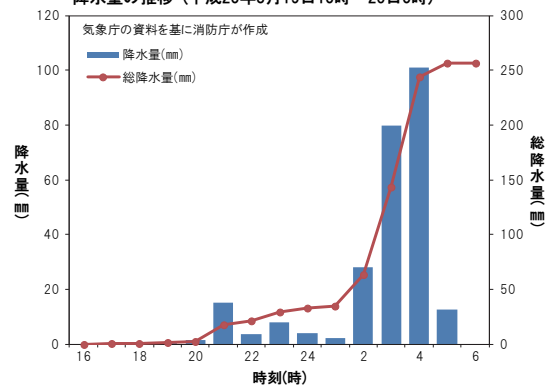
日付	時間	発令等	主な報道内容
8月19日	21:26	大雨・洪水警報発表	・市「避難勧告遅かった」(平成26年8月21日・読売新聞) 広島市が8月20日午前4時15分に最初の避難勧告を出した時点で、すでに土石流などの被害が発生していた。土砂災害警戒情報は、20日午前1時15分に発表されていた。市消防局危機管理部長は、「避難勧告は人的被害を回避するため、災害が起きる前に出し、安全な場所に避難してもらうのが本来の目的。今回は雨量の分析を誤り、勧告を出すのが遅かったことは間違いない」と語った。
8月20日	1:15	土砂災害警戒情報発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・緊急避難場所の指定・周知(平成26年9月2日・産経新聞) 広島市の土砂災害で多数の犠牲者が出た安佐南区の八木地区で8月20日に避難勧告が出された際、市が浸水で避難所として使えなくなっていた市立梅林小学校へ避難を呼びかける情報を住民に送っていたことが分かった。区の担当者は、避難所周辺や準備の状況を十分に確認しないまま情報発信したことを認め、「避難しようとした方々に申し訳なかった」としている。</li> <li>・緊急避難所の開設(平成26年9月14日・朝日新聞) 広島市の土砂災害で、避難勧告時に大半の避難所が開設できていなかった。夜間の避難所開設や避難勧告のあり方に大きな課題を残した。今回、安佐北区は午前4時15分に、安佐南区は午前4時30分に避難勧告を発令したが、この時点で開設していた避難所は安佐北区の2カ所だった。安佐南区の災害対策本部は4地区の自主防災組織の役員に解錠を求める電話をかけたが、つながらなかったという。区内の集会所では、住み込みの管理人が寝ていたため、避難してきた数人の住民が中に入れなかったという。</li> </ul>
	1:35	広島市災害警戒本部設置	
	3:00	土砂災害発生 (3:00～3:30)	
	3:21	消防への通報(第1報) 男児2人が生き埋め 以降多数通報あり	
	3:30	広島市災害対策本部設置	
	3:49	記録的短時間大雨情報	
4:15	安佐北区避難勧告発令 ※以降順次発令		

## 3 気象の概要

8月15日から20日にかけて、前線が本州付近に停滞し、前線上を低気圧が東に進んだ。前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本と東日本の広い範囲で大気の状態が非常に不安定となった。

このため、局地的に雷を伴って非常に激しい雨が降り、特に、19日から20日にかけては、広島県広島市安佐北区三入において最大1時間降水量が101.0ミリ、最大3時間降水量が217.5ミリ、最大24時間降水量が257.0ミリとなり、いずれも観測史上1位の値を更新した。この大雨により、広島県広島市で土砂災害が発生し、死者74人の人的被害が発生した。

広島市安佐北区三入  
降水量の推移(平成26年8月19日16時～20日6時)



## 4 被害の概要

場 所：広島市 安佐北区、安佐南区  
 発 災 日 時：平成26年8月20日(水)3時～3時30分頃  
 人 的 被 害：死者74人  
 負傷者69人(重傷47人、軽傷22人)  
 住 家 被 害：全壊179棟、半壊217棟、一部破壊189棟、  
 床上浸水1,084棟、床下浸水3,080棟  
 非住家被害：457棟



国土地理院 資料

## 5 災害の時系列

### 8月19日

- 16:03 大雨・洪水注意報発表
- 21:26 大雨・洪水警報発表
- 23:33 洪水警報解除

### 8月20日

- 0:57 洪水注意報発表
- 1:15 土砂災害警戒情報発表
- 1:21 洪水警報発表
- 1:35 広島市災害警戒本部設置
- 3:00 土砂災害発生(3:00~3:30)
- 3:21 消防への通報(第1報)男児2人が生き埋め  
※以降、多数の救助事案の通報あり
- 3:30 広島市災害対策本部設置
- 4:15 安佐北区(大林、可部、亀山の一部、可部南、三入、三入東)避難勧告発令※以降、順次発令
- 7:58 安佐南区(八木四丁目 42、43、48、49、50番街区)避難指示発令
- 16:20 洪水警報解除  
洪水注意報発表
- 18:30 土砂災害警戒情報解除

### 8月21日

- 4:05 大雨警報解除  
大雨注意報発表

### 8月22日

- 5:02 大雨警報発表
- 16:07 大雨警報解除  
大雨注意報発表
- 17:45 洪水注意報解除

### 8月23日

- 20:13 大雨注意報解除

### 8月24日

- 12:00 以降、避難勧告・指示順次解除



1 礼文町長からのメッセージ

『“こんなことが島であるわけではない”が現実に』 礼文町長 小野 徹

役場で町民課長もしていたので、災害時の対応は心得ていた。町長になってからも、災害に遭ったときは先頭で指揮を取らねばならないと感じていた。ただ、道道沿いや国有林での土砂崩れとかはあったが、町として災害対応することはなかった。雪崩も防止工事が進んで、最近はあまりなかった。洪水のニュース映像などを見て、大変だなと思っていた。広域に避難をさせるような必要は、これまで幸いなことになかった。土砂災害はまったく頭になかった。

離島防衛を想定した御殿場での自衛隊の演習視察などで島を出ていて、役場は副町長に全権を委任していた。土砂災害発生連絡を受け、早く島に帰ろうとしたが、結局は予定通りの便になった。新幹線の車内の文字ニュースで、2人亡くなったことを知り、ホテルの部屋で礼文島の映像をテレビニュースで見て、“なぜあんなに水があるのか。こんな事が島であるわけではない”と思ったが、それが実際だった。島に戻るまで丸一日、イライラ、イライラしていた。

50年に1度の雨と言われたが、これからは普通に起こりうる意識しないといけない。当時はなかった避難勧告の基準も作ったし、自治会単位での避難支援をお願いした。

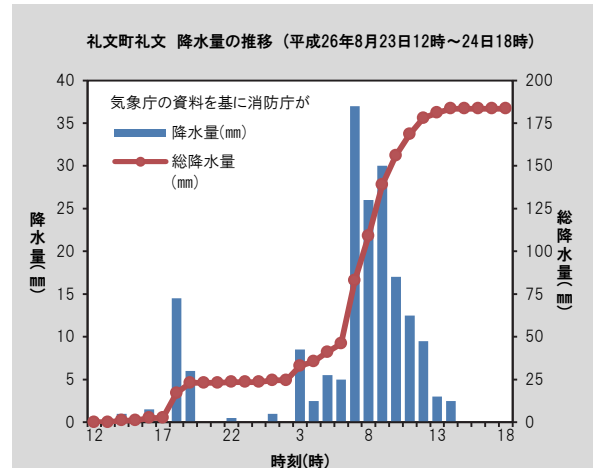
2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
8月24日	8:00	礼文町災害対策本部設置	・ <b>人手不足 避難勧告に遅れ</b> (平成26年8月26日・東京新聞) 8月24日の大雨による土砂災害で母娘が死亡した <b>北海道礼文町が、災害発生前に道から避難勧告を数回促され</b> ながら、人手不足などを理由に <b>見送っていた</b> ことが道と町への取材で分かった。 礼文町の総務課長は「別の地区でも土砂災害があり、 <b>避難勧告を出しても対応する人手がなかった</b> 。母娘が死亡した現場への道も寸断されて危険だった」と説明。北海道宗谷総合振興局は、土砂災害警戒情報や大雨の状況を踏まえ、24日午前11時ごろから3、4回にわたり「強い助言です」と町に避難勧告を出すよう電話で伝え、災害発生後も避難勧告するよう助言を続けた。町は同日午後4時50分になって避難勧告を出した。町によると、避難所には1ヶ所につき2～3人を配置して安否を確認、お年寄りらを車で送迎する人手も必要になり、町職員は約100人(ただし、うち災害対応できる職員は65人程度)で、島外にいた人もおり対応できたのはより少なかったという。
	8:10	9か所で <b>避難所開設</b>	
	8:18	大雨警報発令	
	10:20	土砂災害警戒情報発令	
	13:00頃	土砂災害発生	・ <b>避難勧告4時間遅れ</b> (平成26年8月25日・毎日新聞) 土砂災害で2人が犠牲になった北海道礼文町は、 <b>大雨時に避難勧告を発令する基準などを定めたマニュアルを策定していなかった</b> ことが、町への取材で分かった。 <b>避難勧告を出すよう24日午前に道が町に促したが、</b> 災害現場の同町船泊村地区を含む7地区340世帯に <b>避難勧告を出したのは、発生から約4時間後の同日午後4時50分</b> だった。町は「 <b>災害対応の在り方について検証したい</b> 」としている。
	16:50	<b>避難勧告発令</b>	



### 3 気象の概要

8月23日頃、日本海北部の低気圧が北海道付近に近づいた後動きが遅くなった。また、上空には寒気が入り大気の状態が非常に不安定となった。このため、宗谷北部や利尻・礼文を中心に23日夜から局地的に激しい雨が降り、礼文町香深では1時間降水量41.0ミリと極値を更新した。23日から24日にかけて、利尻富士町と礼文町では、50年に一度の記録的な大雨となったところがあり、2日間の総降水量は、礼文町香深207.0ミリ、稚内市開運191.5ミリ、豊富156.0ミリ、枝幸町歌登144.5ミリとなった。



### 4 被害の概要

**場 所:** 北海道 礼文町大字船泊村字高山  
**発 災 日 時:** 平成26年8月24日(日)13時頃  
**人 的 被 害:** 住宅裏山の土砂崩れにより、81歳と55歳の女性2人が死亡、1人負傷  
**住 家 被 害:** 全壊2棟、一部損壊6棟、床上床下浸水9棟  
**非 住 家 被 害:** 全壊1棟、半壊2棟、床上浸水1棟  
**そ の 他 被 害:** 礼文町元地地区45世帯86人及び観光客等29人が法面崩壊による通行止めのため孤立など。



### 5 災害の時系列

8月22日

20:37 大雨・洪水注意報発表

8月23日

8月16日から1週間、佐渡で行われた離島甲子園の応援と、離島防衛を想定した陸上自衛隊の「富士総合火力演習」の視察で御殿場に行くため、島に残る副町長に全権を委任して、島を離れていた。

あとから聞いたら、23日の雨で、いつも増水する島北部の船泊地区でまた増水したという連絡があり、夜から防災担当と建設課の職員らが現場対応していた。24日は、午前7時から町内のパトロールなどをする予定だったという。

8月24日

8:00 礼文町災害対策本部設置

午前7時に集まった職員の上に、役場周辺の河川も氾らんしたという情報が入ってきたという。副町長が、すぐ職員招集をかけて、この時間に副町長をトップに礼文町災害対策本部が設置していた。この段階では、私には特に連絡はなかった。

8:18 大雨警報発表

**10:20 宗谷地方土砂災害警戒情報発表**

**13:10 高山地区土砂災害発生情報発表**

視察をしていた演習が終わり、陸上自衛隊富士学校の体育館にいて、関係者の挨拶が始まっていた午後1時半ごろ、島から電話があった。高山地区で土砂崩れがあって、埋まった人は救出して運ばれているという情報だった。朝から災害対策本部も立ち上げているという報告だった。詳しい状況は分からない。表に出てゆっくり聞こうと思ったが、周りもざわざわしているし、私だけ話をするわけにはいかないと考え、「ちゃんとやってくれ」と言って切らざるを得なかった。この時点では、まだ亡くなったという情報ではなかった。

雨は午前中がピークだった。あとから聞いたら、4カ所の川の氾らんと、最終的には115カ所だった各地の地すべり情報が次々に入り、職員が状況確認に追われていたのが午前中だったという。それが、一段落付いた時に、それまで被害情報がなかった高山地区から土砂崩れに家が飲み込まれた、という情報が入ってきたという。

**16:50 一部地域に避難勧告発令**

すぐ戻らなくてはと、自衛隊の方にも御殿場駅まで送ってもらえないかと相談をしたが、一般人も3万人見学した訓練が終わったところで混雑していてタクシーも見つからない。送迎バスに乗せてもらい、午後3時過ぎにJR御殿場駅に着いた。御殿場から電車で三島まで出て新幹線に乗ったら、車内の文字ニュースが礼文島の土砂災害で犠牲者が出たということを伝えていた。「さっき搬送された方は、亡くなってしまったんだ」と。食事も取らずに、無我夢中で移動手段を確保し、車内でも電話をしたり、かかってくるしたりした。周りに人がいても、電話を出ざるを得なかった。

品川のホテルに入って、テレビニュースで礼文島の映像を見た。役場や港の近くで、腰の近くまで水に浸かっている人の映像が出ていた。その場所のすぐ目の前は海なのに、なぜあんなに水があるのか。こんな事が島であるわけではないと思ったが、それが実際だった。

その日のうちに、札幌へ帰れる便はあったが、礼文島に帰ることができる時間は、翌日の定期便と変わらない。すぐ帰ってこようと思ったし、あとから「札幌からタクシーでも飛ばして来い」と町会議員からも指摘されたが、大雨の後に鉄路や陸路を選択して失敗したこともあったので、予定通りの翌日の便にした。

ホテルから、午後7時ぐらいに町役場に携帯で電話をしたが、ちょうど災害対策会議をやっているということだった。こちらから、特別に何かしろという指示はしなかった。帰ったら指揮を取らねばなくなるわけで、いまのうちに睡眠を取る、ということを考えて。ただ、亡くなった人が出たので、これは大変だと、島に戻るまで丸一日、イライラ、イライラしていた。

**21:00 土砂災害警戒情報解除**

**21:17 大雨警報解除**

**大雨注意報発表**

**8月25日**

**8:00 避難勧告解除**

午前10時ごろ、羽田空港について、役場に電話をして「これから飛行機に乗る。雨は止んだか」と確認した。「今日は止んでいる。これ以上、被害がでる事はなさそうだ」ということは聞いた。稚内空港から稚内港に行き、午後3時半稚内発のフェリーで島に帰った。

午後5時半ごろ、礼文島に着いた。稚内や札幌から新聞やテレビの記者が詰めかけていたが、「あとから記者会見をする」と待っていてもらった。

---

まず、状況を把握するため、被害に遭った高山地区を確認した。見慣れた景色の中に家の残骸が残っていて、“すごいな”と感じたが、“なぜここが崩れたのだろう。他にもそういう場所はいっぱいあるのに”とも思った。亡くなられたのは、診療所の婦長さんをやられていた方とそのお母さんで、ご遺体が安置されているお寺でご親族にお悔やみを申しあげた。目が不自由なお父さんが、助かって入院されていた診療所にもお見舞いに行き、退院後のことも考えないといけないと思った。

午後8時過ぎの記者会見では、「なぜ、当時、居なかったのか」、「なぜ、帰ってくるのが今になったのか」、「なぜ、避難勧告を出さなかったのか」という質問ばかりだった。24日当日の午前中は、フェリーが到着しても船から出せないぐらいの状況で、避難勧告を出して外に避難させるのは危険だという判断で出しておらず、雨が小降りになってから出している。どう聞かれても、その時の判断だから、それでいいのではとしか言えなかった。何度も同じような質問が繰り返されるので、カチンと来て、私にとっては孤立地区の対応の話が大事だから聞いて欲しいと、声を荒げて言ったような気がする。

島には駐在の記者がいなくて、隣の利尻島や稚内、テレビなどは札幌から記者が来ていた。その中に、以前から知っている旧知のベテラン記者がいて、「町長、あまり怒ってはダメだ」となだめてくれた。「御殿場の演習場にいたら、電話も通じなかつたら大変だっただろう」とも言ってくれて、ありがたかった。

島に帰る前から、亡くなった人が出たので、いろいろ言われるだろうとは思っていたが、今考えると、何を言ったか、あまり覚えていない。

## 8月26日

**8:00** 道や自衛隊、警察も参加した対策会議を行った。孤立していた元地の集落へ、町が観光クルーズで使っている船と稚内開発建設部（国）の船を出して、1日3回、通勤、通学、通院などの対応をすることにした。その日の午前10時ごろに出した最初の船で元地に行った。皆さんに集まってもらって、船を出す方針を説明したが、「通行できなくなったことは今までもあった。何も心配ねえぞ」と言ってくれた。直接、行って話をしたことは、よかった。

1 秩父市長からのメッセージ

『1ページしかなかった雪災害対策』秩父市長 久喜 邦康

前の日は、夕方から雪が降り出し、携帯メールで危機管理課から情報を仕入れて対応を見ていた。1週間前の雪は48cmで、あの程度だろうと安易に構えていた。朝起きて、見た雪の量は尋常ではなかった。朝から雪かきをしようとした市民もいたが、雪をどける場所もなく、とても手に負えなくぼう然とされていた。秩父市全体が、周囲から孤立したと実感した。でも、頼りの地域防災計画には、雪に関しては1ページしかなく、これでは全然対応が効かなかった。自衛隊の派遣要請も、県の結論に2日かかった。

秩父は周りが山で、台風が来ても風も吹かない。川は低いところを流れているので洪水もない。地盤は古くて固いので地震も大丈夫。山間部の土砂災害危険地帯は別として、災害は少ないところという共通認識が、私も市民にもあった。

でも、地球温暖化や東日本大震災の地震の影響などで、何が起こるか分からないのが今の時代だ。「想定外」はあり得ないと、地域防災計画を見直した。除雪計画もきめ細かく手厚く変更して、後手に回った県との連携もきちんとやれるようにした。

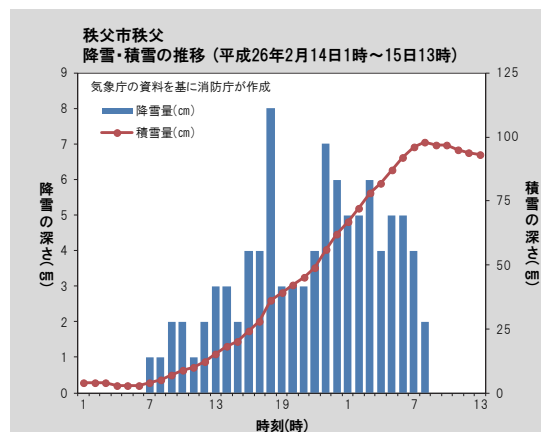
2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
2月14日	15:09	大雪警報発表	<p>・埼玉県、秩父市の自衛隊派遣要請を断る(平成26年2月18日・日本経済新聞)</p> <p>大雪で住民が孤立した埼玉県秩父市が15日以降、県に自衛隊の災害派遣要請を再三求めたにもかかわらず、<b>県が「市街地除雪のための派遣は難しい」などと断っていた</b>ことが18日、市や県への取材で分かった。</p> <p>実際に県が派遣要請したのは2日後の17日午後6時半。上田清司知事は「断ったのではなく、人命救助が必要な切迫した状況に至っていなかった。県と自衛隊で協議し、総合的に判断して、要請しなかった」と話した。秩父市によると、久喜邦康市長は15日午後5時20分ごろ、県に電話で自衛隊の派遣要請を依頼。孤立集落があることを伝え、その後も市職員が「病院に行けず困っている人もいる」などと繰り返し求めたが、県は「除雪目的の派遣は難しいだろう」として受け入れなかったという。</p>
	18:15	市内各地で車両が孤立、立ち往生多数発生	
2月15日	1:33	雪崩によりトンネル内車両孤立	
	2:45	橋で車両が立ち往生	
	8:00	<b>災害対策本部設置</b>	
	16:43	寺の宿泊者ほか10人孤立情報あり	
2月16日	17:20	<b>県に自衛隊派遣要請</b>	
	8:00	県より自衛隊派遣要請なしの返事	
2月17日	18:30	<b>秩父市ほか4町連名で自衛隊派遣要請</b>	
	21:50	自衛隊による物資空輸決定	

### 3 気象の概要

2月13日21時に南西諸島で発生した低気圧は、本州の南海上を北東に進み、次第に発達しながら15日明け方から昼頃にかけて関東地方沿岸に接近した後、関東の東を北東に進んだ。また、関東地方の上空約1,500m付近には-6℃以下の寒気に覆われていた。

この低気圧と上空の寒気の影響により、14日早朝から雪が降り続き、埼玉県では2月8日から9日に引き続き大雪となり、最深積雪は、熊谷で62cm、秩父で98cmとなった。



### 4 被害の概要

場 所：秩父市  
発 災 日 時：平成26年2月14日(金)  
人 的 被 害：孤立世帯約750世帯  
住 家 被 害：断水約146世帯、停電約1,100世帯



### 5 災害の時系列

#### 2月14日(金)

##### 15:09 大雪警報発表

午前中から、3月の補正予算の決裁業務とかをやっていたが、雪はパラパラと降っていたが大雪ではなかった。午後3時から会議が2つ入っていて、危機管理課の打ち合わせもあったが、テーマは雪ではなかった。

##### 18:15 雪崩により黒文字橋で除雪作業中の車両が孤立、市内各地で車両立ち往生が多数発生

夕方から雪が降り出してきて、警報が出るので大変だと、午後6時から交通安全協会の新春のつどいがあったが、雪が降ってきたので行くのをやめた。市内あちこちで、現場が対応し始めている情報は、危機管理課から携帯メールで情報を仕入れて対応を見ていた。

#### 2月15日(土)

##### 1:33 雪崩により中津川地内のトンネルで車両が孤立

##### 2:45 ループ橋で車両7台が立ち往生

なぜか外が暗い感じがするので飛び起きたら、窓ガラスが半分以上埋まっているほど、雪の量は尋常ではなかった。生まれて初めて見た。普段は車で行くが、使えなかった。歩いて行けば7、8分だが、雪なので長靴を履いてラッセルしながら30分ぐらいかかった。朝から雪かき



をしようとしている人もいたが、手に負えずにぼう然としていたのを目の当たりにした。

#### 8:00 災害対策本部設置

登庁して、すぐ危機管理課に詰めて、逐一、報告を受けた。災害対策本部の設置に迷いはなかった。あの雪を見たら、誰でも判断できただろう。連絡や対応でがやがやしている状況で、副市長と教育長が来たので、「来られる職員は来い」と招集をした。

過去、災害は少ないとは言ったが、台風の時は、対策本部を立ち上げてきた経験があった。新型インフルエンザの対策本部も立ち上げたこともある。対策本部は、後手に回ってはいけないという気持ちが常にあるから、なんの抵抗もなく設置した。私が救急医療の医者として 25 年、危機管理が仕事上植え付けられていたからだと思う。

市危機管理課からは、各集落や地域に連絡手段があり、民生児童委員の要援護者支援のネットワークもあったので、すぐ連絡を取らせた。各集落や要支援者の状況は、15 日中には把握できていた。

#### 16:43 大陽寺で宿泊者ほか 10 人が孤立しているという情報が入る

##### 中津川地内のトンネル孤立者に県防災ヘリで物資を投入

情報は、次々に入ってくる。除雪計画通りにやろうとするが、道路の雪を横に寄せようとしても通り道ができない。県警ヘリなどが対応して、人工透析患者への対応や孤立者の救出をしてきていたが、秩父全体を、ヘリ対応で賄えなかった。

#### 17:20 県に自衛隊の派遣要請

いつも相談に乗ってくれる秩父県土整備事務所の所長に「秩父市全体が孤立している状況で、雪崩でつぶれかかっている家もあり、生命危機に陥ってきているので、自衛隊派遣をお願いしたい」と相談。市長が直接、電話で要請をと言われたため、夕方の対策本部会議後、県危機管理防災部の副部長に電話をし、「除雪のためではなく、秩父の孤立で、生命の危険が出てきた」として自衛隊の派遣を要請した。

### 2月16日(日)

8:00 県から電話があり、「要請については検討したが、県から自衛隊に派遣要請しない」との返事だった

#### 11:00 対策本部会議

対策本部会議で、いちごハウス7割、キュウリハウスが全部つぶれたというショッキングな報告を受けた。150人ぐらい入所している老人施設から「入院患者の非常食がなくなってきた。重油が心配だ」と連絡があった。山の方からは、停電で水が出なくなってきたとも。

13:05 中津川地内トンネル、県防災ヘリ現場に着くも強風のため救助できず

15:05 大陽寺、県警ヘリ強風のため基地を離陸できず

いろんなことが起こってくるなと思いながら、一つ一つの事例に対応していただけだった。ただ、数年前に登山客の救出でヘリ墜落の事故があったので、ヘリの事故とかの二次災害を起こさないかが心配だった。

### 2月17日(月)

4:00 中津川の除雪、100m進むのに1.5時間かかる

7:50 県警ヘリで中津川地内トンネルの被災者を救出

8:00 人工透析患者を県防災ヘリで輸送

9:05 県警ヘリで大陽寺の宿泊者を救出

14:57 中津川地内トンネルの被災者、全員救出

### 18:30 秩父市ほか4町と連名で県へ自衛隊派遣を要請

秩父地域の1市4町の首長同士で、もう一度、自衛隊の派遣要請をしようと文書で再度要請をした。それを受けて県で決めてくれたので、ホッとした。自衛隊を待ち望んでいたが、まず、17日のうちに連絡将校が来た。18日午後1時に部隊が到着し、市庁舎5階にも自衛隊の拠点が作られた。ホールにベッドを持ってきて寝泊まりし、ヘリや車で現地に行く。頼もしく、心強く思った。

### 21:50 自衛隊ヘリによる物資空輸決定

2月18日(火)

県警ヘリ、県防災ヘリ、自衛隊ヘリが孤立地区へ食糧、水、医薬品等を輸送(18日～)

旧秩父セメント第1工場跡地へ残雪の受け入れ開始

除雪で道を作って集落に到着した自衛隊の部隊に、20軒ぐらいの集落の人たちが、「大丈夫だよ」と元気そうな姿で返事をしていたという話を聞いたときは、“さすがだな”と思ってホッとした。山の中の方たちは、普段から準備していて、年寄りも生きていく術を知っていてたくましい。秩父の住民は災害には強い。集落内できちんと人のつきあいをしている。

現地に行かせた職員のスマートフォンを使って、お年寄りやテレビ電話をしたが、それでお互いに元気をもらった。やってみて分かったが、災害時の有力な手段だ。顔が見ることができると元気になる。

98cmの雪を脇に寄せても、交通障害を起こしてしまう。雪捨て場が、必要になるが計画には何も書いていない。どこかに捨てないとダメ、と市長室で議論をしていて、職員が考えたのが、旧秩父セメントの工場跡地の利用だった。すぐに依頼して了解を取った。

町会単位での除雪で、雪を軽トラックに積んで雪を捨てられるようにした。トラック1台でいくら、という形でお金も払うような仕組みを作った。

2月19日(水)

県警機動隊員が中津川、中双里の孤立世帯へ物資を配布

新潟県からの除雪車両作業開始

2月20日(木)

県警、自衛隊が孤立世帯の安否確認、物資輸送(20日～)

各町会へ「地域ボランティア除雪隊」による道路の残雪処理を依頼

いろんなところから除雪の応援隊が入ってきたが、社協が市民ボランティアを立ち上げてくれた。町会単位での除雪は、軽トラックで、セメント跡地に雪を捨てられるようにした。みんなも道に出て、除雪をしていた。ひまさえあれば、自分ちの前だけでなく、周りの地区も除雪していた。こんなに秩父の住民は、まとまりがいいのかと実感した。

県にお願いして、23日に防災ヘリで上空から視察し、まだ道路が通じていなかった中津川の集落の臨時ヘリポートに降りた。揺れるヘリの中で気持ち悪くなって、立っているのもやっとなほどだったが、雪の中で地域の人たちが集まってくれた。「新潟からの除雪車が近くまで来ている。もう少しで道路が通るので、ここから出ることができる」と話したら、とても喜んでくれて、私自身も元気をもらった。トップが直接会って、元気づけるのは大切な役割だ。

2月21日(金)

自衛隊レンジャー部隊による大血川地区水道取水口の復旧

2月24日(土)

自衛隊撤収



## 1 甲府市長からのメッセージ

## 『すぐできると思っていた除雪』 前甲府市長 宮島 雅展

協定に基づいて除雪を頼んだので、正直、すぐできると思っていた。だが、その後も市民からの苦情が多いので、実際に動いていないことが分かった。重機を運転しようにも、オペレーターが会社に泊まり込んでいるわけではないので出動できないのだ。稼働しだしても、県道は県が、市道は市が、それぞれに除雪しているので、うまくつながらないところが出来てしまい、県と市の連携も足りなかった。つなげてやるようにしないと、地域住民の役には立たない。

我々は基礎自治体で、住民と直接、接している。住民の要望をひしひしと感じるし、直接手を出して、責任もこちだ。シミュレーションをしっかりと、何があってもやってやりすぎとすることはない。県は助けてはくれるけど、最終的な責任は基礎自治体にある。主体的になって、自分たちがやらなければならないというような覚悟を持ってやって行くことが必要だ。

首長はいつもいつも、いろいろな事態に、戦々恐々としている。それをはねのけるために、取り組む。神経質になってけこうだ。空振りでもいい。そういうことだと思う。

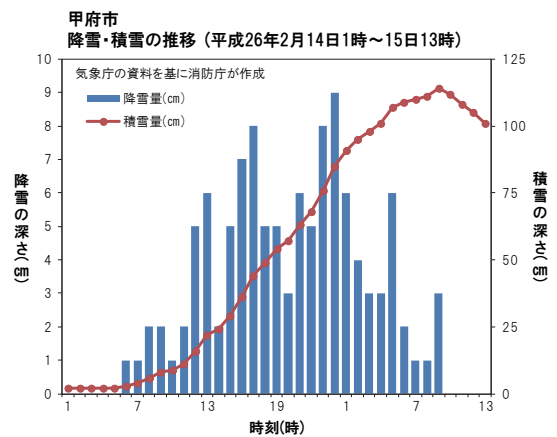
## 2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
2月14日	10:03	大雪警報発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>想定超す雪捨て場不足</b>(平成26年2月19日・読売新聞) 甲府市では、幹線道路の除雪が進み、交通事情は回復しつつある。しかし、<b>急速小学校の校庭を雪捨て場に指定したことで、校庭が使えない事態</b>になっている。また、<b>校庭まで車で入るルートが十分に確保できず、かつ活用し切れていないケースもあり</b>、混乱が続いている。</li> <li>同市では、防災無線で雪捨て場として民有地の提供を依頼する一方、水路に雪が捨てられて水があふれるケースも相次いでおり、水路に雪を捨てないよう市民に呼び掛けている。</li> <li>・<b>大雪混乱収束遠く</b>(平成26年2月19日・読売新聞) 山梨県内では、中央道や県内の国道の通行止めが解除された18日も物流の混乱が続き、ガソリンや灯油の売り切れが相次いでいる。</li> </ul>
	18:33	<b>防災行政用無線放送 大雪注意情報、メルマガ配信</b>	
	19:45	県道において雪崩発生	
	20:01	<b>避難所開設</b>	
	21:30	<b>県に自衛隊派遣要請</b>	
2月15日	7:30	昇仙峡羅漢寺付近で車両内に人が閉じ込め	<ul style="list-style-type: none"> <li>甲府市のガソリンスタンド(GS)「穴水セルフ甲府店」では、灯油の給油機に「売り切れ」と書かれた紙が貼られていた。17日朝に入荷できたが、普段の2倍近い客が訪れ、夜には完売したという。18日夕には4キロリットルがタンクローリーで届き、待ちわびた客らがポリタンクに給油していた。</li> </ul>
	9:50	山間部の旅館に23人孤立	<ul style="list-style-type: none"> <li>同県富士吉田市のGSでも、ガソリンと軽油、灯油がいずれも17日に売り切れた。出荷元に何度連絡しても、「道路状況が悪くて届けられない」と言われるばかりという。店長は「客から『燃料はあるか』という電話が5分に1本かかってくるが、平謝りするしかない」とこぼした。</li> </ul>
	14:00	<b>甲府市雪害対策本部設置</b>	

### 3 気象の概要

2月13日21時に南西諸島で発生した低気圧は、本州の南海上を北東に進み、次第に発達しながら15日明け方から昼頃にかけて関東地方沿岸に接近した後、関東の東を北東に進んだ。また、関東地方の上空約1,500m付近は-6℃以下の寒気に覆われていた。

この低気圧と上空の寒気の影響により、山梨県は14日未明から15日昼前にかけて雪が降り、前週(2月8日から9日)に引き続き大雪となった。月最深積雪は甲府で114cm、河口湖で143cmに達し、いずれも統計開始以来の極値を更新する記録的な大雪となった。



### 4 被害の概要

場 所： 甲府市  
発 災 日 時： 平成26年2月14日(金)  
人 的 被 害： 負傷者56人※、孤立世帯最大284世帯686人、  
帰宅困難者68人  
住 家 被 害： 一部破損394棟※

※平成26年6月30日現在



### 5 災害の時系列

#### 2月13日

18:20 大雪・着雪注意報発表

#### 2月14日

10:03 大雪警報発表・なだれ注意報発表

天気予報では、夕方から夜にかけては雨になるという。その通りになって、雪が溶けてくれればいいと思っていたが、そのまま雪が降り続けてしまった。

19:45 古関町地内の県道36号において雪崩が発生

車4台が巻き込まれ、4名が身動きの取れない状態となった。甲府消防・消防隊(9隊、25名)が出動し、同日中に2名を救出し、残る2名も翌15日夕方、救出した。

旧上九一色村での雪崩で、閉じこめられて、消防が出ていると連絡はあった。副市長に、対策本部を作らなければならない、と言う電話を入れていた。

20:01 上九一色出張所避難所を開設し、帰宅困難者受入

21:30 山梨県に陸上自衛隊災害派遣を要請

#### 2月15日

7:30 昇仙峡羅漢寺付近で車に人が閉じ込められ、山梨県中北建設事務所により救出された。

7:50 市立小学校校庭を雪置場に決定

朝になったら雪が止んでいて、午前8時に市役所に電話を入れた。対策本部の設置について、「おい、どうした」と確認したら、「もう招集をかけた」という返事。でも、部課長でやるので、午後2時にならないとみんな出てこれないという。4車線でグリーンベルトもあって、いつもなら車がバンバン通る甲府で一番大きな通りの車道を、泊まっても良いように身の廻り品を入れたリュックを背負って、長靴を履いて市役所に向かった。

ビルの谷間から出てきた人から「どこに行くのだ」と聞かれ、「役所に行く」と言ったら、カメラを持ち出してきて、私の長靴姿を撮った。あとで写真を送ってくれた。

信号機の下で携帯電話が鳴ったので、立ち止まって出していると、信号機の上から肩の上に雪がバシャッと落ちてきて、びっくりした。役所に着いたら、300キロワットの自家発電ができるように3階に設置してあった太陽光パネルの上から、雪がバシャッと落ちてきた。まともに当たればケガをする。「これは危ない」とすぐにロープを張った。

**9:50** 上積翠寺町の旅館に23名が孤立しているという救助要請があり、山梨県を通じて自衛隊に要請を行った。17日11時に自衛隊のヘリコプターにより23名全員を救出した。

常備消防や消防団が、既に動いていて、個々に要望されていたところに対応をしていたが、対策本部として全体を見るようなこととか、幹線道路の除雪をどうするかというような状況ではなかった。

#### **14:00 甲府市雪害対策本部設置。第1回本部員会議実施**

最初の対策本部会議では、「集合住宅の1階で、ドアが雪で開かない」などの報告もあって、「これはとんでもないことになる。一人暮らしの人はどうなるか」と思った。民生委員を総動員して安否確認をして頂くしかないと思った。仕組みは作っていなかったが、地域の実情に詳しい民生委員に頼るのが一番いいだろうと判断した。全部が終わるのに1日以上かかったが、結果は異常なしだった。

あとになって、電話をもらった市民から「民生委員からの電話が嬉しかった」、「雪で特別に困ることはなかったけど、心配して電話してくれて勇気付けられた」と言われた。市として何ができる、できないではなく、「大丈夫ですか?」という声かけをすることが大事だ。自治会長たちも、同じことを言っていた。

除雪については、地域防災計画で道路の除排雪計画を決めていた。正直、頼めばすぐできると思っていた。苦情が多いので、実際に動いていないことが分かった。どうしてやらないのかと聞いたら、重機を運転するオペレーターがいない。会社に泊まり込んでいるわけではないからと。これでは、国道も空かないだろうと思った。オペレーターが、会社に来て重機を持ち出すことができても、まず近所の生活道路の除雪で終わりになるだろうと思った。「俺んちの前の雪を早くかたづけろ」という人はけっこういたが、「そうはいかないじゃんけ」と甲州弁で説明すると、「ほうだね」ということで分かってくれた。

**2月16日**

**9:25 防災行政無線で除雪協力依頼を放送**

**2月17日**

**9:10 上越市、長野市、磐田市へ除雪支援要請**

**19:10 JR甲府～小淵沢間運行再開**

**22:00 上積翠寺町で孤立者有りとの連絡。除雪を進め、20日に開通した。**

**23:00 中央自動車道八王子IC～諏訪IC上下線通行止解除**

**2月18日**

9:35 草鹿沢町で孤立者有りととの連絡。除雪を進め、19日に開通した。

**2月22日**

13:50 孤立状態となっている高成町自治会において、雪崩の危険性が高まったことから、横浜市消防局及び長野県消防防災航空センターのヘリコプター2機において全住民（7世帯、7名）を救助した。

**2月23日**

12:30 孤立状態となっている古閑町の1世帯（2名）が、市職員の呼びかけに応じ、富士河口湖町へ避難した。

**3月12日**

14:30 第3回本部員会議実施 甲府市雪害対策本部廃止

1 三好市長からのメッセージ

『合併で出先の職員減 IP電話もダウン 被害状況把握が後手に』 三好市長 黒川 征一

徳島県三好市は平成18年3月1日に6町村が合併して誕生した。面積は721.48平方キロで、四国の市町村では最も広い。合併後、職員は約200人減り、旧町村の役場も窓口機能だけの総合支所になった。他の地区から総合支所に通っている職員も多く、災害時にすぐに参集するのは難しい。また、地域の防災組織も過疎化・高齢化で機能しづらくなっている。そこに予想もしない大雪が降った。「やられたことはわかったが、広範囲で全体像を把握するのに時間を費やした」というのが正直なところだ。

一方、市の90%以上の世帯は光ファイバー回線を利用したIP電話を導入していたが、これが停電で使えなくなり、併用しているNTT固定電話も停電時に使える機種と使えない機種があり安否確認は困難を極めた。高齢者世帯は携帯電話を持っていないことも多い。これらの悪条件が重なり、孤立の全体像の把握が後手に回ったのは事実だ。全体像がわからないうちに自衛隊の派遣要請もできず、遅れをとってしまった。

職員を増やすことはできないので、孤立の可能性のある集落に、地域に詳しい職員OBや集落支援員、連絡員などのネットワークを構築し積極的な情報収集の強化に努めていきたい。また、市役所内での人材育成や危機管理に精通した専門職員を置いて指揮命令系統を強化するほか、集落ごとの自主防災組織も活性化しなくてはならないと考えている。

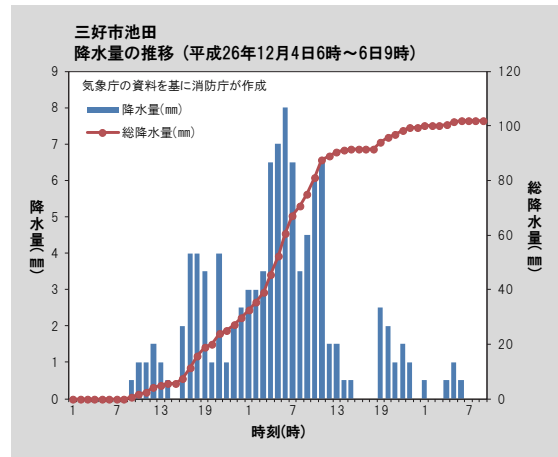
2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
12月5日	3:33	大雪注意報発表	・停電でIP電話不通 安否確認遅れ(平成26年12月9日・東京新聞) 5日からの大雪で、徳島県西部の三好市やつるぎ町、東みよし町では一時、700世帯、1,300人以上が孤立した。県の方針でインターネット回線を使うIP電話をいち早く普及させた「IT先進地域」として知られるが、 <b>停電で不通になる弱点が顕在化し、安否確認に時間を要する結果となった。</b>
	5:20	国道で車130台が立ち往生	・IP電話の普及が裏目に(平成26年12月10日・朝日新聞) 孤立状態になった地区の世帯の多くは固定電話が通じない状態になった。インターネット回線を使った <b>IP電話の普及率が高く、停電すると通話できない</b> ためだ。IP電話の普及率は三好市で87%。防災無線が聞ける端末とセットで購入を勧められるため、特に高齢化率の高い地域で導入が進んでいるという。徳島県地域創造課の担当者は「 <b>これほど長期の停電は想定しておらず、課題が浮き彫りになった</b> 」と話す。
	8:40	四国地方整備局が災害対策基本法76条指定	・四国で車両130台雪で一時動けず(平成26年12月6日・東京新聞)
	11:00	3,300戸余りが停電	
	17:15	<b>待機体制</b>	
12月6日	4:33	着雪注意報発表	国土交通省四国地方整備局によると、愛媛、徳島県境の国道192号で五日未明、雪で身動きが取れなくなる車が相次ぎ、約130台が立ち往生した。重機での除雪作業が進められ、同日午後10時までですべて解消した。愛媛県四国中央市ー徳島県三好市間の通行止めは継続。立ち往生したのは大型車が多く、除雪のための路肩移動などに時間がかかった。同整備局は改正災害対策基本法に基づき、国道192号の38キロを、やむを得ない場合に放置車両などを強制移動できる区間に初指定。法を適用し、立ち往生して道をふさいだ車両を路肩に移動させたほか、トレーラー1台が荷台部分を置いて現場を離れたため待避所に動かした。
	8:30	<b>第1非常体制</b>	
	14:00	県が自衛隊災害派遣要請	
	17:30	<b>三好市災害対策本部・支部設置</b>	



### 3 気象の概要

気象庁によると平成26年12月5日から6日にかけては、西日本の上空に氷点下30度以下の強い寒気が流れ込み、強い冬型の気圧配置となって四国の山地を中心に大雪となった。徳島県三好市西祖谷のアメダスポイントでは積雪は最大で6センチ（6日午前9時）だったが、三好市池田町漆川、佐野や井川町井内などでは積雪が60センチを超えた場所もあった。



### 4 被害の概要

- 場 所：三好市
- 発 災 日 時：平成26年12月5日(金)
- 人 的 被 害：孤立世帯最大538世帯1018人
- その他の被害：
  - ・県道・市道などの幹線道路が積雪や倒木により各地で通行不能
  - ・市道は144路線・247kmが通行止め
  - ・倒木などにより最大970戸が停電

避難所に誘導される高齢者(三好市役所提供)



### 5 災害の時系列

#### 12月5日(金)

- 3:33 大雪注意報発表
- 4:33 大雪に関する徳島県気象情報 第1号
- 5:20 国道192号(三好市池田町～愛媛県四国中央市)で車130台が立ち往生して通行止めに
- 8:40 四国地方整備局が、国道192号を災害対策基本法76条指定  
立ち往生した車両や放置車両を移動へ
- 9:00 三好市西祖谷 積雪2cm観測
- 11:00 三好市、美馬市、つるぎ町などで3300戸余りが停電
- 11:15 大雪に関する徳島県気象情報 第2号  
〔徳島県の「三好」では、6日明け方にかけて大雪となる見込み。  
予想される降雪量(5日12時～6日12時) 山地10センチ 平地5センチ  
積雪や路面凍結による交通障害に注意〕
- 16:16 大雪に関する徳島県気象情報 第3号  
〔徳島県の「三好」では、6日明け方にかけて大雪となる見込み。  
予想される降雪量(5日18時～6日18時) 山地10センチ 平地5センチ  
積雪や路面凍結による交通障害に注意〕

17:15 待機体制（本庁・分庁舎）

17:45 三好市、国道 192 号渋滞に伴う避難所開設

## 12月6日(土)

5日の夜から6日にかけてが降雪のピークだったが、6日の朝の段階ではまだそれほどの危機感はなかった。6日の昼ごろから市内各地から倒木の被害を知らせる電話が入り始めた。この時点ではまだIP電話は通じていた。倒木による停電がすぐには解消しそうにないとわかってきてから、危機感を持ちはじめた。自衛隊派遣の話も出たが、全体状況もわからない中で闇雲に要請するわけにはいかないと考えていた。

4:33 着雪注意報発表

5:00 三好市西祖谷 積雪 4 cm観測

5:15 大雪に関する徳島県気象情報 第4号

〔 徳島県の『三好』では大雪になっている。  
6日昼前にかけて積雪や路面凍結による交通障害、電線や樹木への着雪に注意 〕

8:30 第1非常体制（本庁・分庁舎・井川支所）

9:00 三好市西祖谷 積雪 6 cm

9:45 三好市が消防団に出動要請

消防団が市内各所で倒木処理にあたる。

11:10 大雪に関する徳島県気象情報 第5号

〔 「三好」では降雪の峠は越え、大雪の恐れはなくなる 〕

11:13 大雪注意報解除

14:00 徳島県が自衛隊の災害派遣要請（東みよし町、つるぎ町）

15:00 自衛隊の派遣要請について検討

16:00 自衛隊の派遣要請について徳島県と協議

17:30 三好市災害対策本部・支部設置

18:48 自衛隊の派遣要請（確定）

22:25 漆川地区の腹膜透析患者を救助

## 12月7日(日)

最大 538 世帯 1018 人が孤立 自衛隊ヘリや電話による安否確認、情報収集を行う

11:10 徳島県が三好市を自衛隊の活動範囲に加えることを決定

14:00 避難所開設（池田地区 1 か所）

15:00 自衛隊 35 名が活動開始

避難所開設（井川地区 4 か所）

## 12月8日(月)

職員による安否確認と情報収集を行う

6:00 自衛隊 168 名（つるぎ町、東みよし町、三好市）が活動開始

## 12月9日(火)

今回の大雪では倒木が大きな壁だった。倒木のために重機が入れず、除雪ができない。人が1本1本チェーンソーで切ってどけていく「人海戦術」以外方法がなく、それが孤立や停電の早期解消を阻んだ。市の職員、消防団、自主防災組織、市内の建設業者、森林組合、林業クラブなど総動員で頑張ったが…。倒木さえなければ、という思いだ。

自衛隊ヘリによる救助



孤立集落への物資搬送

除雪・倒木撤去作業

6:00 自衛隊 196 名(つるぎ町、東みよし町、三好市)が活動開始

12月10日(水)

---

飲料水・灯油の配布作業 除雪・倒木撤去作業

6:00 自衛隊 400 名(つるぎ町、東みよし町、三好市)が活動開始

13:20 孤立地区解消

12月11日(木)

---

除雪・倒木撤去作業

6:00 自衛隊 200 名(三好市)が活動開始

12月12日(金)

---

停電が完全に解消

12月14日(日)

---

災害対策本部解散

## 1 王滝村長・木曽町長からのメッセージ

## 『すれ違っていた火山の情報と受け止め側の思い＝取れていなかったコミュニケーション』 王滝村長 瀬戸 普

王滝村は、昭和54年の噴火、59年の長野県西部地震と2度の災害の経験がある。うちの村にとっては、夏も冬も御嶽山がすべて。観光で生きてきた村として、火山と共に暮らさねばならないので、お客さんの安全確保は培ってきたつもりだった。7年前には、県の「元気づくり支援金」で、山小屋にヘルメットや懐中電灯、ハンドマイクを整備し、防災行政無線の屋外スピーカーや無線機を配備した。県の二酸化硫黄濃度の常時監視がだめになったので、山小屋で携帯用のガス警報器で毎日監視をしてもらい、登山客の避難・誘導の訓練もやっていた。前兆があれば、しっかりと規制をかける覚悟はあった。でも、スピーカーを通じて避難を誘導した時点では、現場では惨状になっていた。

平成20年に噴火警戒レベルを導入した時には、これからはコミュニケーションをとってしっかりやろうという話だったが、そのあとは止まってしまっていた。噴火後の下山にはヘルメットや防災行政無線機が役に立ったが、それではダメだった。

9月11日から解説情報が3回も出された後、村の担当が長野地方気象台と連絡を取ったが、警戒レベルは1のままだし、火山性微動もないので大丈夫だと。気象庁が伝える情報と、それを受け止める間の思い入れが何かすれ違っていたのだろう。村としては何もできなかった。

## 『当初はテレビ頼みだった行方不明家族への情報提供』 木曽町長 原 久仁男

今回の噴火対応は、町の居住区域が大きく被災したとか、町民が犠牲になったりしたとかとは違う特殊な部類の対策が求められた。

隣の王滝村役場では、自衛隊や警察、広域消防隊による救助活動の捜索本部が設置され、木曽町では、県立木曽病院や木曽警察署などの機関があるので、心肺停止状態で麓に運ばれる検視場所の提供を求められた。

その結果、安否確認や行方不明者のご家族の皆さんが、全部こちらに来ることになり、ご支援をどう展開するかということになった。皆さんの休息や食事の提供、仮眠する場所を確保しないとイケないのだが、既に、ホテルや旅館はマスコミ関係者で満室。町内の日帰り温泉施設に協力を要請し、また、地域で料理が提供できるよう地元の皆さんから応援をいただき、豚汁や煮込みうどんのような食事のご支援をした。

当初は、捜索活動の状況など町に入る情報源は極めて少なく、多くはテレビ報道による情報からで、「どういう状況なのか最新情報を教えて欲しい」とご家族から詰め寄られたりした。

町の災害対策本部には警察や消防からの連絡要員も来ていたが、自衛隊員の方が王滝村役場の対策本部に移ってしまい、現地の情報が入ってこない。また、国の現地対策本部と県の対策本部は県庁内に置かれていたため、「とにかくご家族の皆さんに対して、情報をきちんと出して欲しい」と切望した。その後は、町の待機所へ警察職員が待機するなど、家族の欲しい情報がようやく入り、待機所に詰める皆様や対応職員も落ち着いて状況を見極められるようになった。

## 2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
9月27日	11:52	御嶽山噴火	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難施設整備遅れ(平成26年9月30日・読売新聞) 今回の噴火では、山小屋や神社軒下にたどり着けたかどうか不明を分けた。御嶽山には山小屋や無人の避難小屋などが16あり、暴風雪などの際の避難場所としても使われてきた。ただ山小屋の多くは木造で、噴石に耐えられる造りにはなっていない。御嶽頂上山荘では、噴石が屋根や窓を突き破り、噴煙が中まで入り込んだ。 数十センチ以上の厚さがあり、噴石を防ぐ鉄筋コンクリート造りのシェルター(退避壕)は御嶽山に一つもなく、長野県王滝村の担当者は「これまでの噴火では人的被害がなく、シェルターの必要性は考えていなかった」と説明。木曾町の担当者は「突然の噴火に備え、山小屋にヘルメットや無線機などを配備したが、シェルターなどがあれば被害はもっと防げたかもしれない」と話した。</li> <li>・火山情報活用に課題(平成26年9月30日・日本経済新聞) 気象庁は今年11日に火山性地震の増加を知らせる「解説情報」を発表していたが、登山者らに危険性が十分周知されていたかは疑問が残る。長野県王滝村は山小屋に地震情報を知らせたが、「警戒レベルは引き上げられていなかったのも、登山者らに広く注意を促す判断はしなかった」(総務課)。警戒レベルが噴火前の御嶽山と同じ「1(平常)」の活火山がある自治体の多くも、レベルの引き上げを判断目安としている。</li> </ul>
	12:20	木曾町災害対策本部設置	
	12:30	王滝村災害対策本部設置	
	12:36	噴火警報発表 噴火警戒レベル3(入山規制)に引き上げ	

## 3 噴火の概要

9月27日11時52分頃、御嶽山で噴火が発生した。中部地方整備局が設置している滝越カメラによれば、南側斜面を噴煙が流れ下り、3kmを超えるのを観測した。御嶽山で噴火が発生したのは2007年以来である。その後の調査により、火砕流は火口列から南西方向に約2.5km、北西方向に約1.5km流下したことがわかった。

この噴火の直前の11時41分頃から連続した火山性微動が発生し、噴火発生以降、振幅の大きい状態が約30分間続いた。田の原観測点では、微動の発生直後の11時45分頃から山側上がりの変化を、11時52分頃から山側下がりの変化を観測した。山側上がりから山側下がりの変化に変わった頃に噴火が始まったものとみられる。

降灰の有無について自治体等に聞き取り調査を行った結果、御嶽山の西側の岐阜県下呂市萩原町から東側の山梨県笛吹市石和町にかけての範囲で降灰が確認された。

御嶽山概要



内閣府 資料

## 4 被害の概要

場 所：御嶽山  
発 生 日 時：平成 26 年 9 月 27 日(土) 11 時 52 分  
人 的 被 害：死亡 57 人、行方不明者 6 人、重傷 27 人、  
軽傷 32 人



国土地理院 資料

## 5 災害の時系列

9月11日

10:20 火山の状況に関する解説情報発表 第1号

9月12日

16:00 火山の状況に関する解説情報 第2号

9月16日

16:00 火山の状況に関する解説情報 第3号

気象庁からの解説情報が FAX で入ってきたが、噴火警戒レベルは 1 でずっときているので、まあ「微動もないので」と解釈した。情報が出たという報告はあったが、あの時点では「大丈夫というなら大丈夫なんだろう」と。あとから思うと、気象庁が伝える情報と、それを受け止める、その間の何かがすれ違っていたのではと、反省しなければならないと私どもの立場では思う。私も個人的に解説情報が出る 10 日前に登って山小屋に 1 泊 2 日していた。噴火の 1 週間前には、「娘さん 2 人と登ってみたい」という知り合いを、山小屋に泊まってもらい、「とても良かった」と感激していた。当時は、平常だと思っていた。(王滝村長)

火山のことは、勉強不足で分からなかった。火山性地震の情報を総務課長から聞いて、「ちょっとヤバイかも知れない」と思ったが、9月11日に発表された解説情報から「すぐ噴火する状況ではない」とするコメントの発表もあり、その後、地震が少なくなったので、ある意味で忘れてしまっていた。火山に対しては、以前から担当レベルでやってはいたが、その気になっていない。火山の知識が低かったことは反省事項だ。(木曾町長)

9月27日

11:52 御嶽山噴火

30 年前の地震で崩れた荒れ地の緑化を記念した「水と緑の感謝祭」の式典があったので、私は 1 時間前から松原スポーツ公園に行っていた。村役場にも、普段の土曜日より人がいた。そこに山小屋から「噴火したぞ」と一報があって、私にも電話が入った。山には雲がかかっていたが、それを超えて黒い煙が上がっていたので、「まずいな」と思いながら役場に帰った。まず、山の状況を把握しなければと、担当を決めて、2カ所の山小屋と連絡を取らせていたら、職員も集まってきた。(王滝村長)

午前中は 9 時ごろからイベントの開会式に出て、10 時過ぎからは、孫も出ている町内一斉の

保育園の運動会を見ていた。午前 11 時 45 分頃に終わって、歩いて帰れる家に着いて「やれやれ」と思った時に、総務課長から携帯に電話が入った。びっくりはしたが、「噴火か」というぐらいの受け止め方で、まさかこんなにたくさんの犠牲が出るような大きな災害になるとは想像もできなかった。状況が分からないので、「とにかく情報を集めてくれ」という指示を出した。対策本部を設置した方がいいのではないかという連絡もあったので、副町長に電話で「先に行ってすぐ体制を取って職員を集めてくれ」と言うやり取りをした。(木曾町長)

**12:20 木曾町災害対策本部設置**

**12:30 王滝村災害対策本部設置**

**12:36 噴火警報発表 噴火警戒レベル 3(入山規制)に引き上げ**

剣が峰山荘からは、12 時 15 分には「自分では歩けないほど、けがをした人がいる」という連絡が入っていた。私は素人だが「噴火した石は熱いか」と聞いたら「熱くない」という。「ガスもがまんできないわけじゃない」と言ったので、火事にはならないだろうと判断。「予報では明日になれば天気も良い。ヘリが行くぞ、それまでがまんできるか」とお願いをした。2 人の山荘職員が、ケガした人と一緒に一晩居てくれることになり、(歩ける人には)ヘルメットを渡して降ろさせた。その後は、発電機も止まったので、バッテリーが持ちそうな防災行政無線と衛星携帯電話で、2 時間に 1 回、連絡を取ることにして対応した。

王滝頂上山荘からは、午後 1 時 4 分に「8 合目まで視界が開けた」と連絡があり、「見計らって降りろ」と伝え、支配人が 5w の防災行政無線機を持ってお客さんの最後尾について下山してくれた。けが人に付き添って降りた支配人が、7 合目の王滝口の駐車場に着いたのは午後 6 時 3 分だった。(王滝村長)

**14:31 県が自衛隊の災害派遣要請～ 捜索活動開始**

他に用事があったので、役場に出るのは午後 4 時ごろになった。その間、けが人が出ているのではないかという情報は入っていた。山小屋の関係者とも顔見知りの総務課長のルートを使いながら情報を集めろという指示をしたが、思うように情報が入ってこない。山小屋からは、消防本部に連絡していたようだが、役場には情報があまり入ってこなかった。私が役場に出る前に、「ロープウェイの駅に職員 2 人を配置して連絡を取らせろ」という指示をした。

体験上、待っていて情報をもらうのではなく、こっちから行って情報をつかむのは当たり前。向こうの情報だけでは、こちらの判断には不十分だ。何が必要なのか、どうしたらいいのかは、こっちの人間ではないと判断できない。現地から、ロープウェイを使わずに徒歩で降りてくるといふ情報が入ってきたので、マイクロバスの手配も事前にできたとし、避難場所の準備も自然の流れでできた。(木曾町長)

**15:32 三岳交流促進センターに下山者の避難所設置**

三岳交流促進センターで一晩過ごし、次の日に電車で帰る人もいたので、駅まで送る対応をした。

ただ、県立木曾病院まで運ばれたケガをした人が、「たいしたことがない」となって帰ることになり、そこからどうやって駅まで行くのか、泊まれる宿があるのか、など困った人もいたようだ。あとからその情報を聞いて、そこまでの配慮が欠けたという反省はあった。(木曾町長)

**10 月 5 日**

**16:30 木曾町台風 19 号接近に伴い(火山灰土石流による警戒地域) 避難勧告発令**

**10 世帯 18 名が避難**

**16:37 王滝村避難勧告発令 10 世帯 14 名**

10月6日

---

13:33 王滝村避難勧告解除

10月13日

---

15:30 王滝村避難勧告発令 10世帯 14名

16:30 木曾町避難勧告発令 26世帯 71名

10月14日

---

5:00 王滝村避難勧告解除

5:50 木曾町避難勧告解除

10月16日

---

搜索活動終了





## 1 白馬村長からのメッセージ

## 『地域の「ささえあい」で 死者ゼロに』 白馬村長 下川 正剛

足元に活断層があるという意識はなく、まったく想定外の地震だった。42棟もの住宅が全壊しながら幸いにして一人も死者が出なかったのは、地震の直後に地域の住民や消防団が、チェーンソーやジャッキを使い、壊れた建物の下にいた幼児や高齢者などをすばやく救出したからだ。被害の大きかった堀之内地区、三日市場地区では日ごろから社会福祉協議会が中心となって「ささえあいマップ」を作り、どの家に高齢者などの災害時要配慮者がいるか、夜はどの部屋に寝ているのか、いざというとき誰が手助けするのか、まで詳しく把握・周知していた。こうした情報共有があったので、暗がりの中でも救出活動ができ、住民の安否も速やかに確認できた。最近は個人情報の問題があり、家族構成や災害時要配慮者の所在を把握しておくのはなかなか難しいが、今回の災害を経験して改めてその重要性を実感した。堀之内地区では、村の「スポーツ祭」にあわせて防災訓練を行った。日ごろから地域の行事や子供の見守りなどで協力する関係を作っておかなければならない。

## 2 報道内容

日付	時間	発令等	主な報道内容
11月22日	22:08	地震発生	・犠牲者ゼロの白馬村 普段から把握(平成26年11月26日・東京新聞) 住民の手による救出ができたのは、住民同士の強い結び付きと自治会組織、そして新潟県中越地震を受けて県が2005年に独自に策定を促し、白馬村では10年に作成された「災害時住民支え合いマップ」がある。マップは高齢者や障害者らがいる住宅を地図で示し、今回の地震でも住民の安全確認に役立った。
	22:20	白馬村災害対策本部設置	地元区長の鎌倉宏さん(61)は「毎年マップを更新し、要介助者がどこにいるのか分かる。住民が高齢者宅に真っ先に救助に入り、等酌した救急隊に的確に場所を指示できたのも、こうした制度と普段のつながりがあつてこそ」と話した。
11月23日	0:02	県へ自衛隊先遣隊出動要請	・住民連帯で死者ゼロ「白馬の奇跡」防災モデルに(平成26年11月29日・産経新聞) 震度5強という強い揺れに襲われた白馬村では40棟以上の家屋が全半壊しながら、住民らによる迅速な安否確認と救助活動が功を奏し、死者をゼロに抑えた。
	0:50	自衛隊先見隊到着	堀之内地区の柏原頼子さん(67)は、地震後すぐ倒壊した隣家に向かった。「向こう三軒両隣の家族なんて知っていて当然。誰が家のどこで寝ているのかだってわかっているよ」。倒壊家屋のどこを捜索すればよいのか消防団などに即座に伝えられ、スムーズな救助に繋がった。
	1:30	災害救助法適用	・「生活再建めど立たぬ」(平成26年11月26日・日本経済新聞) 最大震度6弱を記録した長野県北部の地震で、県警は25日、地震による県内負傷者は45人、うち重傷者は10人と発表した。多くの世帯で断水が続き、長期化すると見込まれる地域もある。自宅が無事でも水道水が出ないため避難を余儀なくされている住民は「ライフラインが復旧しないと生活再建のめど立たない」と不安を募らせた。

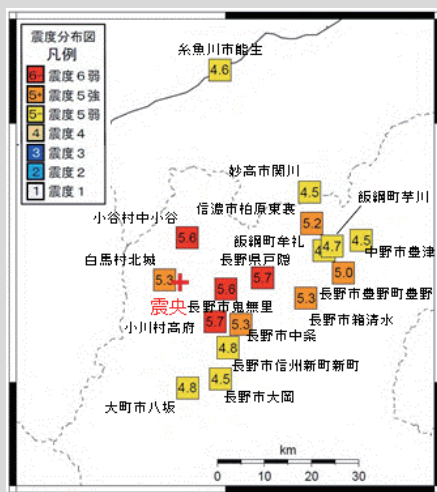
### 3 地震の概要

平成 26 年 11 月 22 日 22 時 8 分頃に、長野県北部を震源とする強い地震が発生した。マグニチュードは 6.7、震源の深さは 5 km。

長野県長野市、小谷村、小川村で震度 6 弱、長野県白馬村、信濃町で震度 5 強を観測したほか、中部地方を中心に、東北地方から中国地方の一部にかけて震度 5 弱～ 1 を観測した。

信州大学などの調査により白馬村の各地で地震断層による地盤のずれ（変位）が見つかった。ずれの見つかった位置は、以前から活断層として知られていた「神城（かみしろ）断層」にほぼ一致しており、余震の震源の分布もこれに沿っていることから。今回の地震は神城断層の活動によるものとみられている。長野県はこの地震を「長野県神城断層地震」と命名した。

本震の震度分布(震度5弱以上)



気象庁 資料

断層による地盤のずれ(白馬村塩島)



### 4 被害の概要

**震源地：**長野県北部

北緯 36 度 41.5 分、東経 137 度 53.4 分

**発生日時：**平成 26 年 11 月 22 日(土)22 時 8 分頃

**震源の深さ：**震源の深さは約 5 km

**地震の規模：**地震の規模(マグニチュード)は 6.7

**人的被害：**重傷 3 人、軽傷 20 人

**住家被害：**全壊 42 棟、半壊 33 棟

倒壊した家屋



### 5 災害の時系列

#### 11 月 22 日(土)

##### 22:08 地震発生

3 日前から下から突き上げるような地震が続き、役場の職員が長野地方気象台などに問い合わせをしていた。地震発生時は自宅で入浴中で、下から突き上げるような大きな揺れを感じたので、

すぐに着替えて登庁した。自宅から役場まで約4キロ、車で7～8分かかったが、すでに職員が大勢参集していた。自宅にある野平地区も道路や上下水道が被害を受け、私もこの日から8日間ほど村長室で寝起きすることになった。

#### 22:20 白馬村災害対策本部設置

被害の大きい堀之内地区では駐車場（サンサンパーク）に住民が避難していたので、役場のマイクロバス2台を向かわせ、避難所となる村の保健福祉ふれあいセンターに移動してもらった。

### 11月23日(日)

0:02 長野県へ自衛隊先遣隊出動を要請

0:50 自衛隊先遣隊が到着

1:30 災害救助法適用

1:45 第1回災害対策本部会議

地震の直後から、住民や地元消防団、北アルプス広域消防本部が、被災地域の点検や救助にあたってくれた。深夜で被害の全容はわからなかったが、地震の直後から救出活動や安否確認を行ってくれたので、日が出る前には「死者はいない」ことが把握できた。

7:10 消防団・消防署が三日市場地区、堀之内地区の被害状況をローラー作戦で点検

12:25 野平地区、青鬼地区に避難指示

### 11月24日(月)

13:30 安倍総理大臣 被災現場視察

15:00 ボランティアセンター開設

倒壊家屋からの貴重品取り出しや家屋の補強などを専門とする技術者のボランティア「テクニカルチーム」が来てくれたのは助かった。

### 11月25日(火)

7:00 第1回被災地区住民説明会（復旧状況など）

### 11月26日(水)

7:00 第2回被災地区住民説明会

8:30 災害時応援協定に基づき和歌山県太地町、静岡県河津町に職員派遣要請

### 11月27日(木)

7:00 第3回被災地区住民説明会

8:30 義援金受け入れ開始

11:00 神城多目的集会施設に荷物一時預かり所を開設

18:00 第15回災害対策本部会議 応急仮設住宅建設を決定

### 11月28日(金)

7:00 第5回被災地区住民説明会

10:30 応急仮設住宅建設を長野県に要望

18:00 第16回災害対策本部会議

被災地区住民の二次避難所（村内のホテル）への移転を決定

道路や隣接家屋に影響を及ぼしている倒壊家屋の解体方針決定

### 12月29日(月)

仮設住宅入居開始（27世帯・76人）

## これらの事案から得られる「災害対応のポイント」

### 迅速かつ的確な避難勧告等の発令

→避難勧告・避難指示の発令は、住民の生命に直接的に関わる極めて重要な対応であり、「見逃し」よりは「空振り」の方が望ましい。

的確な避難勧告等の発令のためには、

○平時から、

- ・避難勧告の発令基準の明確化
- ・避難勧告等が発令された場合に、被害が発生しなかったとしても、「空振りで良かった」と捉える住民意識の醸成が必要。

○また、発災時においては、

- ・最悪の事態を想定し、市町村長自身が、一刻も早く本庁舎に駆けつけること
- ・躊躇せずに災害対策本部を設置し、庁内の体制を災害対応モードに切り替えることがポイントとなる。

○さらに、訓練で出来ないことは本番でも出来ない。

- ・市町村長自らが訓練に参加し、危機管理への対応について、常に高度化を図る必要がある。

### 避難所開設と避難勧告等の発令

→避難勧告等の発令に合わせて避難場所を開設することを基本としつつ、局地的かつ短時間の豪雨の場合には、避難場所の開設を待たずに躊躇なく発令することも必要。

- ・避難勧告等の発令については、避難住民の受け入れに備え、発令に合わせて避難場所を開設することが原則。
- ・局地的かつ短時間の豪雨の場合など、避難のためのリードタイムがない場合にあっては、立ち退き避難に加え、屋内安全確保を促すことも重要。
- ・さらに、危険が切迫している状況にあっては、避難所開設前であっても躊躇せず避難勧告等が発令することが必要。

### 関係機関に対する適切な応援要請

→一市町村での対応には限界がある。住民の生命を守るためには、被害の規模に応じ、関係機関からの迅速な応援を受ける必要がある。

関係機関からの迅速な応援を受けるためには

- ・発災時における都道府県・消防機関・自衛隊等への一報
- ・平時からの都道府県・消防機関・自衛隊等のカウンターパートの連絡先の把握・登録
- ・関係機関のトップとの良好な関係の構築が必要。

